

## 令和3年度 第4回 岐阜市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和3年11月16日(火) 13時30分～15時30分
- 2 場 所 みんなの森 ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオ
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員
- 4 招聘者 白川村立白川郷学園 校長 大坪 稔 氏  
NPO法人コミュニティサポートスクエア 代表 杉浦 陽之助 氏
- 5 傍聴者 一般4名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ  
(2) 協議「地域が支える、子どもの学びと育ち」  
(3) その他
- 7 議 事

(13時30分開会)

---

### ○佐藤事務局長

只今から、令和3年度第4回岐阜市総合教育会議を開会いたします。本日、司会を務めさせていただきます、教育委員会事務局長の佐藤でございます。宜しくお願いいたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員にご出席をいただいております。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守をよろしく願いいたします。

次に、本日の会議資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元には、紙資料で次第及び席次表を1枚置いております。また、タブレットに資料1、2、3及び参考資料を収納し、準備しております。不足等がございましたら、挙手願います。

それでは、次第に沿って会議を進めてまいります。まず、柴橋市長より御挨拶をいただきます。

### ○柴橋市長

皆様、こんにちは。本日は総合教育会議にご出席を賜りありがとうございます。

また、白川郷学園の大坪校長先生、そして、杉浦様にもご出席いただき、本当にありがとうございます。

実は、この総合教育会議も、委員の皆様や招聘者の方を含めて、全員がリアルの場に集まって開催できるというのは大変久しぶりでございまして、これまではオンラインでのご出席の方もいらっしゃいました。今こうして岐阜市も感染者ゼロを継続できておりますことから、本日はこういったリアルの場で、お互いに近い距離で、議論を深めさせていただければありがたいと思います。

本日の主な論点は、コミュニティ・スクールの深化とサードプレイスの充実ということでありまして、特に大坪校長先生には、白川郷学園で実践されている村民学についてお話しただけということ、大変楽しみにしているところでございます。

村民学と言いますと、私ども岐阜市が被災地支援をさせていただいている福島県広野町に、ふたば未来学園という学校があります。そこでは、子どもたちに、広い意味で福島という地域が抱えている様々な地域課題について、自分は社会に出て行くに当たってそれをどう解決していけるのだろうか、自分に貢献できることは何だろうかということ、学びの中から真剣に考え、大学に進学し、社会に出ていくということを伺いました。村民学という、まさに自分が生まれ育った地域について学ぶということは、それは単に歴史が深いとか、生活習慣がどうであるかということを超えて、そこから見えてくる課題、そして、そこに自分が学ぶ意味というものが、白川郷学園の子どもたちにはどのように映っているのか、大変興味深いところでございます。

また、コミュニティ・スクールは、地域の皆様に支えていただきながらこれまで取り組んできているところですが、より深く地域と関わっていく中で、自分が地域の中で生かされていること、そして学びというものにどうつながっていくかということについて、こうしてリアルの場でお伺いできることを、大変楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願いたします。

また、杉浦様には、これまでメディアコスモス前の広場をご活用いただいたり、地域での子どもたちの学習支援、生活困窮者の支援と、本当にご活躍いただいております、ありがとうございます。

子どもたちにとってのサードプレイスとは、居場所であり、学びの場である、あるいは、ある意味でいうと、自分が安心できる場所ということでもあると思いますが、杉浦様の日頃の活動の中から見えているものを、本日は存分にお話しただければありがたいと思っ

ています。

現在、GIGAスクール構想に基づき、1人1台タブレット及びいつでもどこでもオンラインでアクセスできる環境の整備に取り組んでおりますが、こういったものをリアルの場のみならず、今後、様々な形態でのサードプレイス、これらはどのような可能性を秘めているのか、そういった観点でもお話しいただきたいと思っております。

本日もまた、委員の皆様と実りある議論をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、次第の2、協議に移ります。本日のテーマは、「地域が支える子どもの学びと育ち」でございます。本日は会議の招聘者といたしまして、義務教育学校白川郷学園校長 大坪 稔 様、NPO法人コミュニティサポートスクエア代表 杉浦 陽之助 様のお二人にご多用の中、参加を賜っております。大坪様、杉浦様、よろしくお願いいたします。

### ○白川郷学園 大坪校長

よろしくお願いいたします。

### ○NPO法人コミュニティサポートスクエア 杉浦代表

よろしくお願いいたします。

### ○佐藤事務局長

本日の議事の進行といたしましては、まず事務局よりご説明申し上げた後、続けて大坪様、杉浦様の順にご講演を賜り、その後、意見交換へと進めてまいります。

それでは、まず事務局よりご説明申し上げます。皆様におかれましては、タブレット中の資料1をご覧ください。

### ○兎山教育政策課主幹

事務局よりご説明させていただきます。資料1の2ページをご覧ください。本日はこちらに記載しておりますとおり、順にご説明させていただきます。

続いて、7ページをご覧ください。本日の会議の論点につきまして、ご説明いたします。

本市は、これまでも学校と地域の協働のもと、子どもの学びや育ちを支える取組を推進してまいりました。一方で現在、教育が大きな転換期を迎えていることや、実社会で生きる力の育成が必要視される中、学校と地域がより一層つながりを深め、これらの期待に応えていくことが求められております。

そこで、現在の協働体制や、これまで積み重ねてきた取組を強みとしながら、これらを生かすとともに、その一層の充実、また、新たな価値観の付加を図ることを目指し、施策を検討するべく協議、取り組むべき論点を、1つ目、コミュニティ・スクールの深化、2つ目、サードプレイスの充実として設定いたしました。

それではこの後、それぞれの論点につきまして、事務局よりご説明させていただきます。

### ○星野学校教育審議監兼学校指導課長

学校指導課の星野と申します。よろしくお願ひいたします。私からは、コミュニティ・スクールについてお話させていただきます。

9ページをご覧ください。本市では、平成20年度にコミュニティ・スクールを導入し、平成30年度には、市内全ての幼稚園、学校がコミュニティ・スクールとなりました。

コミュニティ・スクール導入により期待される効果としましては、地域と学校が連携、協働しながら子どもたちの成長を支え、地域と共にある学校づくりを進められるということが挙げられます。またそれにより、社会に開かれた教育課程の実現にもつながります。

次のページをご覧ください。こちらは、地域の人々とのつながりを示す各校の取組の様子です。こうした取組の中で、子どもたちは地域の一員としての自覚、地域への愛着や誇りを持つことができます。また、地域の方のお声がけは、子どもたちの自己肯定感を高めることにもつながっていきます。

次のページをご覧ください。コミュニティ・スクールの導入により、地域の将来の担い手の育成や、地域性を生かした活動を行うことができます。一方で、現状の課題としましては、コミュニティ・スクールの運営が学校主体となっていることで、業務が増加している学校があること、また、活動のマナー化が挙げられます。

そこで、持続可能なコミュニティ・スクールづくりを目指し、学校と地域をつなぐコミュニティ・スクールコーディネーターのスキルアップを目的としたセミナーを今年度より実施しました。これにより、コミュニティ・スクールの意義を踏まえ、学校の行事等に積

極的に協力して取り組んでいきたいというコミュニティ・スクールコーディネーターの意欲を向上させることにつながりました。

12ページをご覧ください。このような今年度の取組を踏まえ、目指すコミュニティ・スクールのあり方と、その実現に向けた課題を、短期、中期、長期に分けて整理しました。

13ページをご覧ください。短期的な目標は、学校と地域の効果的な連携体制の構築です。そのために、学校運営協議会を活性化させる手段として、幅広い年齢層や、業種を考慮した委員の構成とし、地域に生きる次世代の担い手育成を図ります。

また、学校の管理職だけではなく、他の多くの教職員や児童生徒代表も、学校運営協議会の委員と一緒に、学校や地域の課題に対して熟議する場を設定し、地域と学校の柔軟かつ強固な連携を目指します。

14ページをご覧ください。中期的な目標は、地域の特色を生かした多様な取組の展開です。そのために、地域が主体となって行う土曜授業、学校行事等を、学校とコミュニティ・スクールコーディネーターが協議して実施できるよう、コーディネーターの役割を明確にし、その支援の充実を図ります。また、コミュニティ・スクール推進セミナーにおいて、先進校等の実践発表及び有識者の講評を組み入れることで、各学校の好事例の横展開、共有を図ります。

15ページをご覧ください。最後に長期的な目標としましては、地域住民等の参画による地域総がかりの教育活動の推進です。教育委員会と市民協働部門が連携し、地域組織との活動の一体的な運営、取組の実施を考えおられます。そのために、学校行事を精選し、地域行事との合同開催等を視野に入れること、地域の方と中学校区との取組の系統性を検討すること、学校行事の運営に地域の団体にも加わっていただくことなどが挙げられます。

コミュニティ・スクールの深化により、地域と学校が一体となって未来の担い手を育てるという理念を共有し、子どもたちの豊かな成長のために、それぞれが主体的に取り組むことができるようにしていきたいと考えております。

## ○坂井社会・青少年教育課長

続きまして、サードプレイスの充実に向けてのご説明させていただきます。社会・青少年教育課の坂井と申します。

では、17ページをご覧ください。現状分析といたしまして、まずはじめに、サードプレイスの定義と、一人ひとりがその人にとってのサードプレイスを持つことの重要性を、図

のように整理いたしました。去る6月に閣議決定されました、2021年版子供・若者白書において、ほっとできる居場所が多いほど自分が好きだと感じやすくなるという居場所の重要性についての分析結果もございましたが、自分にとってのサードプレイスを持つことが、豊かな心、幸福感につながると考えております。

18ページをご覧ください。それを受けまして、現状の課題を3点挙げております。まず、社会一般にサードプレイスの言葉や定義が広く浸透していないことが挙げられます。そして、子どもたち等の利用者に、既存の施設やサービスにサードプレイスとしての機能があることが十分に伝わっていないことも挙げられます。さらに、施設や活動に携わる運営者においては、サードプレイスとしての役割を担っていくという意識が弱いことも課題であり、当事者も含めた社会一般の意識の醸成が必要だという認識を持っております。

19ページをご覧ください。そこで、こうした課題認識を踏まえたサードプレイスのあり方と、その実現に向けた課題の整理をいたしました。

短期目標としましては、サードプレイス機能の整理と周知、青少年会館・自然の家等での機能の実践を進めたいと思っております。既に中央青少年会館では、草潤中学校に通う生徒の放課後の学びの場を提供しており、自然の家では、ニーズに応える新しいプログラムを実施するなど、新たな取組を始めました。今後、さらなる拡大を目指してまいります。

また、関係機関との共通理解を深め、連携強化につながる企画を検討し、中長期の目標である様々な場面、施設での取組の実践につなげていきたいと考えております。

続きまして、その目標達成に向けた具体の施策について申し上げます。20ページをご覧ください。まずは、サードプレイス機能の定義及び役割を整理し、社会教育委員会議をはじめ、庁内の関係機関において情報共有を図ります。

次に、関係機関との共通理解を深め、連携強化につながる企画として、利用者の学びや体験を記録し、その足跡を見える化する、学びのパスポートを作成したいと思っております。具体的には、一人に一台配布されたタブレットを活用することで、調べたことや、学び、体験等を記録できないか検討を進めてまいります。これにより利用者が自分にとってのサードプレイスを自覚し、また、サードプレイスと呼べる場所が広がるのではないかと考えております。

続きまして、21ページをご覧ください。その一方で、少年自然の家や青少年会館、ドリームシアター岐阜、科学館など社会教育施設における事業や取組を今後さらに進めてまいります。

各施設で行っている事業を通じ、職員や所員との何げない会話やつながりを大切にしつつ、先ほどお伝えした学びのパスポートにより、サードプレイスの見える化を行うことで、一人ひとりにとってのサードプレイスの充実を目指します。さらには、こうした取組をほかの社会教育施設や地域での活動などにも広げていきたいと考えております。

### ○児山教育政策課主幹

それでは、22ページをご覧ください。本日の協議の流れでございますが、この後、招聘者の方々にご講演いただき、市長及び委員の皆様には、最下段に記載しておりますように、コミュニティ・スクールの深化、サードプレイスの充実の2点につきまして、ご協議いただきたいと思いますと考えております。事務局の説明は以上でございます。

### ○佐藤事務局長

それでは、続きまして、大坪様よりご講演を賜りたいと思います。皆様、タブレット中の資料2をご覧ください。それでは大坪様、よろしくお願いいたします。

### ○白川郷学園 大坪校長

白川郷学園校長の大坪でございます。本日は、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

本校は、岐阜市の学校とも交流があります。昨年度は、修学旅行で金華山に登らせていただきました。その際は、当時の早川教育長にも出迎えていただき、あいさついただいたということもございました。

本年度につきましても、則武小学校、三輪北小学校の子どもたちが修学旅行に来てくれて、白川の子どもたちがまち案内をさせていただいたところでございます。

本日は、村民学とはどういう学習かということ、それから、中核をなすふるさと学習のカリキュラムについて、また、共に子どもを育む、ふるさとアドバイザーという学校運営協議会の活動について、各学年の実践内容をお話させていただきたいと思います。

まず、本学園の多くの生徒は、卒業すると下宿をしながら高校に通うこととなります。それは、昔も今も変わりません。トンネルが開通する前は、ほぼ全ての子どもたちが下宿をして高校に通うという時代がございました。こうしたことから、独り立ちさせたい、どこへでも通用する姿に成長してほしいということが、本学園の基本的なコンセプトとして

脈々と受け継がれてきたところがございます。

本学園は、平成23年度に小中一貫校としてスタートいたしましたが、平成29年度に東海地区初の義務教育学校となり、初代校長の水川先生から数えて私で3代目、5周年という学校でございます。

当時は村民学に代わるものとして、「結タイムズ」というものがございました。それがふるさと学習になり、平成30年度に、当時の水川校長先生が村民学を立ち上げられたということでございます。

村民学につきましては、白川郷を科学するというのが大きなキーワードになっております。これは、ある物事について知るだけでなく、体験するだけでもなく、単に好きということだけでもありません。科学するということは、つまりその根拠をきちんと求めるということです。それは、例えばデータや数値といったものです。白川の子どもたちは、村の予算が約35億円で、そのうち教育に関する予算が約3億円であると知っています。水川先生は、そうした根拠をもとにする子を育てたいということ、私にも託されました。人の思いや知恵に触れ、自分の生き方に活かしていただくだけではなく、その中で、独り立ちする力をつけさせたいという、ねらいがございます。

学びの蓄積ということで、本学園では様々な活動が組まれております。それは、人との関わりであったり、本物に触れること、挑戦すること、家族や未来に関すること等がありますが、特に、本物に触れるということに重点を置いており、村長からも、お金をかけてでも本物に触れさせてあげたいということ、常々言っていていただいております。また将来、村に帰ってくる子を育てるのではなく、日本や世界に貢献できる子を育てる、それが本当に村を愛することにつながるのだということも、いつもおっしゃっていただいております。こうした学びは、身に着けてほしい特定の力だけにフォーカスして行うのではなく、降り積もるように一体となって蓄積していくという考え方でございます。

村民学は、ふるさと学習、未来と暮らし、白川びと学という大きく3つの柱で構成されております。白川びと学というのは、白川の人から学ぶというものです。

この中のふるさと学習について、ピックアップして説明させていただきます。どこの市町村にも市町村憲章というものがあると思いますが、「わたくしたちは、霊峰白山のふもと云々・・・」というこの白川村民憲章を、白川の子どもたちは全員、言えます。ここに記されている「美しい風土を誇り自然を守ります」から始まる5つのことが、この村民学、ふるさと学習の土台に組み入れられています。例えば1年生で「美しい風土を誇り自然を



守ります」を学び、6年生で「純朴な心を失わず感謝の生活をします」を学ぶといったように、この白川村民憲章を軸にした活動を組んでいくという流れになっております。大きく分けると、1、2、3年生では身の回りの自然や暮らしを知り、4、5、6年生では他と比べて不変と変化を考え、7、8、9年生では未来の担い手として自ら動くという構成になっております。

少し例を申し上げますと、3年生では伝統食について学習を進めます。探究のサイクルを確実に回すということにこだわりがございまして、まず必ず課題を設定し、情報収集、整理、分析し、まとめたり表現したりするというサイクルを幾つかの活動で回していきます。その際の情報収集の段階において、ICTも活用しながら、実際にその仕事に携わっておられる方、いわば本物を見聞きしたり、つながったりということを大事にしています。

また、3年生から4年生に進級する際に、3年生で衣食住の食に関することを学んだので、4年生では、どんなところに住んでいるのだろう、ということで住の学びにつなげていくというように、学年間のつなぎ目についても大事にして取り組んでおります。

このように、それぞれの学年毎に単発で取り組むのではなく、それぞれが自然につながっていき、最後の村議会での取組み提案という出口につながるまでを、一つの流れとして大事にしているところです。

その中で、学校運営協議会の中に位置づけられている、ふるさとアドバイザーという方々に指導いただく場面が多くあります。本学園の学校運営協議会は、学校支援部、地域活動部、家庭サポート部の3つで構成されております。これらの調整役として、社会教育主事の新谷さゆりさんという方がマネジャーをしてくださっています。動画で少しご覧いただければと思いますが、これは4月の学校運営協議会の様子でございます。

この中の学校支援部というものは、ふるさと学習に関わってくださる方々になります。学年ごとに、学校ではなく学校運営協議会に決めていただいたコーディネーターが2名おり、この2名と学校が打合せをし、学ぶ内容を決定していくのですが、9学年に2名ずつですので、毎年合計18名の方々がコーディネーターとしておられるわけです。

4年生のコーディネーターを例に出しますと、まずこの方々と担当が、合掌家屋についてどう学ぶかということをお打ち合わせします。このコーディネーターと学校の関係性ですが、学校の支援をしていくという形ではなく、コーディネーター自らが、子どもたちにこういうことを考えさせたいという思いを持ち、それをもとに学ぶ内容の検討を進めます。次に、コーディネーターは、約260名いらっしゃるふるさとアドバイザーの中から、自分たち

のねらいに即した方を選び、一緒に教育活動を展開していくこととなります。

村の総人口が1,479人ですから、かなり多くの方にご登録いただいております。個人としても、あるいは事業所としても、どんなことにも協力するよという方が非常に多く、こうした方々に、コーディネーターが依頼するという形です。

次のスライドで合掌家屋について教えているこの方は、コーディネーターではなく、ふるさとアドバイザーです。このように、コーディネーターを通して活動を進め、実際に本物を大事にしますので、次のスライドで示すように、次は実際にやぐらを組んでといった展開をしております。

これは社会教育主事の新谷さんのこだわりでもありますし、学校運営協議会のこだわりでもあります。大事なことは、学校に協力するというものではありません。お互いが対等な立場で、共に村民学、共に村の子どもたちを育てたいという願いがあることで、単なるゲストではなく、教室に来て実際に指導するということが多くみられます。

最後に各学年の実践ということで、少し説明したいと思います。1年生の豊かな自然では、展望台から自然を眺めたり、2年生では農村風景を学んだり、3年生では伝統食ということで、山菜を実際に取りに行き、実物を見ながら、これはこういうところに生えているんだよということを教えてください。

次のスライドは、伝統芸能の踊りです。こういったことも学びます。またこちらのスライドは「結」と「守る会」ということで、白川では防災について非常に大事にしているところがあり、実際に子どもたちにも放水体験させている様子です。

7年生では担い手活動という、いわゆる職場体験のような活動を行います。また、8年生では「ゆいのわ」というお菓子を実際に作って売るといった活動もごさいます。そして、9年生では貢献者として議会に提案をしています。

ここで少し、昨年の議会提案の様子を流させていただきます。9年生の生徒が教育長として答弁しているところです。このように議会提案をすることで、子どもたちが村に貢献するために、どの立場になっても考えるという出口になっているのが、村民学なのです。

最後に、全国学力・学習状況調査の結果の一部お示しします。6年生では、地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますかという質問項目に対し、岐阜県や全国に比べて、本学園の子どもたちの意識は非常に高い状況です。また、地域の行事に参加していますかという質問項目に対しても、参加している割合が83.3%ですから、かなり高い状況です。さらに、自分にはよいところがあると思うかという質問項目に対し

でも、意識が非常に高いことが見て取れます。

9年生につきましても、将来の夢や目標を持っていると回答した生徒は87%に上り、地域の行事には全員が出るという結果となりました。

終わりに、合掌家屋の屋根の吹き替えを村民が協力して行うことに代表される「結」の精神は、脈々と引き継がれて今に至ります。以上でございます。ありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

大坪様、ありがとうございました。それでは、続きまして、杉浦様よりご講演を賜りたいと思います。皆様、タブレット中の資料3をご覧ください。それでは杉浦様、よろしくお願いたします。

### ○コミュニティサポートスクエア 杉浦代表

皆様、こんにちは。特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアの代表を務めております、杉浦陽之助と申します。

岐阜市を拠点にこれまでずっと活動しておりますが、教育という観点でどこまで話ができるのか、少し心配ではありますが、お話をさせていただきたいと思います。

NPO自体の活動は、10年前から行っております。私は30代の後半に、愛知県南知多町の内海というところで、若者自立塾というNPOに勤めておりました。そこは、いわゆる無業状態、ニート状態の若者たちが、合宿を通じて自立を目指していく場所だったのですが、かなり真面目なのに不器用で、生き辛さを抱えてうまく自立していけない方、世の中に出てからつまづいてしまってそれから立ち直れていない方など、孤立してしまっている若者たちの存在にそこではたと気づき、そこから何かできることはないか考えたことが、この活動の始まりでした。

現在の活動内容ですが、生活困窮者自立支援法に基づく岐阜市の事業で、就労準備支援事業を受けさせていただいております。これは、法人の中の様々な活動に若者を取り入れていこうというもので、例えば、屋台を出したり、岩野田北小学校の近くの大きな民家を貸していただき、コロナ禍になるまでは、駄菓子屋をかれこれ4年ぐらい開設しつつ、同じ場所で学習支援を行う等の活動を行ってきました。そうした活動の中に、若者の出番を作っていくということを考えながらやっております。

また、若者たちの交流の場をつくっていく必要性も感じ、中央青少年会館において、サ

テライトわおん事業というものをやらせていただいております。

この他に、主に生活困窮世帯、生活保護家庭、あるいは準要保護世帯の家庭などを対象とした寄り添い型学習支援事業を、生活福祉課から委託を受けて実施しています。具体的には、コミュニティカフェわおんというものを運営しており、栗野のわおんカフェで月、水及び金曜日の夕方4時間、また木曜日は、茜部の公民館で実施しております。

これは貧困の連鎖を断ち切るための活動です。高校へ進学することで、いわゆる学歴という資本を獲得し、経済力のない家庭でも、少しでも前に進み、抜け出せるのではないかと考えるもとので、この事業を行っています。そのため、利用する子どもたちや家庭からお金をいただくことはありませんし、市の事業として実施しているからこそ、この仕組みが今は成立しています。

その他にも、岐阜県から委託を受け、困窮家庭の相談場所であり公的な支援につなげていくきっかけを掴む場所として、よりそいステーション事業というものを実施しています。また昨年は、子ども見守り宅食事業というものを実施しました。コロナ禍で家庭内の課題が深刻化してしまうのではないかと懸念から、家庭に直接出向いて状況を見守ることを目的としたものです。この事業を始める直前に民間の助成金が獲得できましたので、何かいい方法はないかということで、2020年5月の約4週間をかけて、お弁当4,630食を家庭に配りました。このお弁当は我々だけでなく、約16もの店舗や事業者にご協力いただき、日々作って配達するという行っていました。

現在は、エールぎふが把握している家庭の子どもたちや、先ほどご紹介したよりそいステーションでつながっている家庭に対し、週1回お弁当を届けながら、家庭の状況を把握し、行政と連携していくという形で見守りを実施しています。こうした取組が呼び水となり、市の事業として予算化していただけたのであれば、とても光栄なことだと思います。

先ほども申し上げましたが、このNPOのテーマは、孤立しがちな方々をできるだけ孤立させないということです。子どもか大人かに関わらず、その他にも様々なことを行ってきました。大人も子どももOK食堂という、いわゆる全世代向けの子ども食堂のような取組みの運営や、三田洞団地での炊き出し活動、また、被災地支援にも何度も行っております。

本日の論点として、サードプレイスというキーワードがありますが、我々が運営している学習支援室での子どもたちの様子をお伝えしようと思います。正直に聞こえてきた声や様子をお伝えしたいのですが、保護者や教員に対する不満を語る人が多い状況です。

まず、学習支援室に来るようになるきっかけですが、中学校3年生の子どもがいる生活保護受給家庭には、学習支援員が家庭訪問し、学習支援室へ来ることを勧めます。また、他の学習支援室に通っていた子どもが、より近くにあるという理由で来るようになることもあります。子ども自らが、その学習支援室につながってきたというパターンは少ない状況です。誰かが来はじめると、友達が来たいと言っているけどいい？といった話も出るようになり、広がっていきます。現在は、茜部の公民館には11名の子どもたちが登録しており、ほぼ毎回全員来ます。また、栗野のカフェわおんでは、10名の子どもたちが登録しています。

通ってくる子どもたちは、とにかく不満を語っていることが多いです。小学校低学年の子どもたちは、学校のドリルをやり、終わったら帰っていくというパターンが多いのですが、中学生は正直、勉強をそれほどやりません。友達や我々と話していることがほとんどで、自分の話を聞いてもらいたいと思って通ってくる子どもが多いです。

また、茜部の学習支援室に通ってくる11名のうち、私が認識している限りでも、4名の子どもたちが、頻繁に自傷行為を行っています。夏場に長袖しか着ない子どもを見たら、疑っていただいてもよいかもしれません。そういったことをしている子どもたちであれば、スクールカウンセラーにつなごうかという話になるのですが、子どもたちが学校でそういった話をした場合、その対応の仕方によっては叱られたと捉えてしまいます。子どもたちは、カウンセラーに話したところで何も解決しないから必要ない、といったことも平気で口にします。

次のスライドをお願いします。この学習支援室の課題ですが、1点目は、学習支援とうたいながら、どちらかという居場所的な機能が強いということです。しかし、肝心なのは、子どもたちとつながり続けることだと思っています。学習支援の場ですので、最初に勉強する予定や気持ちを確認します。ただ、勉強道具を持ってきていない場合もありますし、勉強する道具を持って帰りなさいと言うこともしません。保護者ともそういったやり取りをすることはほとんどありませんが、家庭の様子や勉強に気が向かない状況について話をしながら、その原因を探っているところです。

2点目は、ある意味サードプレイスとして当たり前のことであり、その次、3点目は、友達との関係性が変化すると、場の居心地が変わってしまうことです。茜部の学習支援室では、公民館の1部屋に、子どもたち11名とサポーター5、6名がおりますが、コロナ禍の影響もあり、その部屋以外の場所が使えず、逃げ場のない状況です。学習支援室に通

えなくなってしまう子も出てきており、現時点では個別に対応するしか手がありません。

4点目は、ある意味課題ではないのかもしれませんが、参加することも休むことも、また所属するかしないかということも自由である、これは本来のサードプレイスという意味においては、逆に正しいと言ってもいいかもしれません。

5点目は、リピートしたくなる場所であり、かつ特定の常連で排他的な雰囲気をつくらないということです。これらを意識し、両立させながらその場を維持していくことが、私たちの役割ではないかと思います。

次のスライドをお願いします。サードプレイスという言葉は、どこかかっこいい言葉で、多くの方が使っておりますが、本当の意味で理解して使っているのか疑問に思うこともあります。基本的には家庭がファーストプレイス、職場や学校がセカンドプレイスで、それ以外の場所をサードプレイスということは、皆様ご存じのことだと思います。

サードプレイスがどのような機能を持つ場なのかということについて調べてみると、「中立的で・所属に関係なく・平等主義で・アクセスしやすく・オープンで・穏やかで・機嫌よく過ごせる場」と定義されており、私は、何かをしましよといった強制されるものがそこにはないと感じました。我々が運営する学習支援室にあてはめてみると、現在は、いわゆる生活困窮状態にある子どもたちを対象を絞って受入をしており、サードプレイスとして地域に根ざしていく上では、この制約を緩める必要性も感じております。一方で、運営面での課題もあり、そう簡単に踏み切れる状態ではないというのも事実です。

現在の岐阜市の取組を踏まえてみますと、例えば中央青少年会館（という代表的な場所）だけといったように集約して運営するよりも、身近にあって、アクセスしやすい場所に存在しているほうが良いと思います。また、安心して心地よく過ごせるような設計であることも必要です。先ほどの例のように、1部屋だけしか使用できず逃げ場がないような状態は、子どもたちにとっては息苦しいかもしれません。

次のスライドをお願いします。もともとサードプレイスは、どのような方にも自分で選択する権利があり、その場を自ら選ぶものだと思います。その中には、何かを学んで習得あるいは獲得するような教育的な目的を持った場もあっていいと思いますし、例えば図書館やムービーシアターなど、自分が心地よいと感じられる場でもいい。サードプレイス自体は多様であるべきだと思います。言い換えると、どのような場をつくれば良いか考えたとき、おそらく答えはなく、無限に様々なアイデアが出てくるのだらうと思います。

ただ、成長過程の子どもたちが居心地よく過ごせるような場所は必要でしょう。私がい

メージしているのは、家庭にも学校にもちょっと居心地の悪さを感じている子どもたちが、自分が先ほどのように自傷行為をし、それを打ち明けても、この大人は変に叱らないだろうとか、なぜやっているのかということも聞いてくれるだろうといった安心感があり、自分を出せ、穏やかに過ごせるような居場所です。

行政でそれをどこまで担保していくかということについては、簡単ではないと思います。先ほどのよりせいステーションのように、現状でその役割を担っている場所がありますので、まずはその地域資源を内情も含め、学校がしっかりと把握し活用していただくと良いと思っています。実際にあった例ですが、カフェわおんで学習支援室を立ち上げた際、当時の岩野田北小学校の校長先生が何度か見学にいらっしゃいました。その後、校長先生からある児童に、この学習支援室に行ってみたらと勧めて頂き、通ってくるようになりました。その児童には、多くの兄弟がおり、家庭環境も複雑であったことから、その兄弟とも順につながっていきました。

また、茜部の学習支援室でもいくつか同様の事例があり、今度は岩野田小学校の校長先生からある児童の保護者へご紹介いただいたことをきっかけに、来室したという事例がありました。その校長先生はそれ以前からも、別の通っている児童の様子も聞きに来てくださっていました。

次のスライドをお願いします。今の話は、求められる施策に掲げたこれらの項目にも通じるものであり、校長先生などを対象に、地域の子ども食堂や学習支援室などとの交流や意見交換の機会を持っていただくことで、学校での継続的なケアが難しい子、家庭的に不安要素が多く、気持ちが学びに向かいにくい子どもたちの居場所として、地域の人たちに見守ってもらうという選択肢も考えていただければと思っています。

その前段階として、まずは、そういった子どもの存在や状況を各学校がきちんと把握することが必要だと思います。そしてさらに、具体的な取組としてこうなったら大変嬉しいと思うことなのですが、この写真は、神奈川県田奈高校の図書館でして、ここでは毎週1回、校内カフェというものが開かれています。ここは私の知人が所属するNPOが運営しており、この方はもともと、スクールカウンセラーとしてこの学校と関わっていました。

しかし、相談室での相談だけでは、生徒たちの本来の姿がなかなか見えてこない、そもそも相談室に来てくれないという状況があったようです。そこで、もっと気軽に相談できる状況をつくるために、図書館に席をくださいとお願いし、さらにカフェをやり始め、今では全校の約4分の1の生徒がここへ来る日もあるという状況だそうです。

運営方法などの詳細は本日割愛しますが、学校側でお菓子や飲み物も準備し、自由に飲食できるようにするなど、生徒たちが喜んで来るような配慮がなされています。私の知人は、このカフェでの相談以外の活動は、生徒たちの信頼貯金を貯めるための時間だと、いつも言っています。生徒たちはこのカフェに来て、そこにいる知らない大人たちを見定めるのだそうです。その中で、この人は話がしやすそうな人だということが分かる、つまり信頼を得てくると、ふとしたタイミングで「ちょっと家が大変で」といった話をしてくれるようになるのです。

次のスライドをお願いします。先ほど紹介した校内カフェに限らず、これらの居場所において子どもたちが関わりを持つことで、より育まれる可能性がある2つの資本を整理してみました。我々が提供できる、例えばその1つとして、文化資本があります。その中には学校側で提供できるものも当然あると思います。

例えば、子どもたちが持っている知識、教養、技能、趣味のレベルはまだまだ広がり少なく、未熟です。演奏すること一つとっても、学校にボランティアで入ってくださるような地域の方々に、本当にプロ級の方なんか意外といらっしゃって、そういう方が関わってくれることで、子どもたちの感性が刺激されることも当然あるでしょう。

そして次に、それらをやっていくためには、演奏ができて道具、楽器がなければ意味がありませんので、そういったものも準備し、かつ子供たちが実際に触れられる環境整備ということも大事です。

さらに、先ほどお話しました高校卒業などの学歴もそうですが、何らかの資格、技術を身につける、その必要性を理解できるように促せると良いと思います。

次にもう一つの資本ですが、これは社会関係資本、ソーシャルキャピタルと呼ばれるものです。人間関係や、モデルたりうる人物とのつながり、信頼といったものを、大人がその場所に関与することで積み上げていくことができます。

かつて私は、2年弱で大学を中退しました。その後、岐阜で約3年間仕事をしたのですが、その間に生活がかなり荒み、23歳で家出をしました。それこそ誰もどこに行ったか分からない、行方不明状態で大阪に行きました。その時点で、社会関係資本は当然ありませんでしたが、何とか住み込みの仕事を見つけて食いつないでいる間に、それが徐々にできていきました。私が仕事に取り組む姿を見て、頑張っているのもう少し職場環境の良いところはどうかといった話も頂き、実際に転職することもできましたが、同僚とうまういなくなり、職場に行かなくなりました。



その後、日雇いの仕事を約2週間やっていたのですが、行かなくなった職場から岐阜の実家に連絡があり、ついに私の居所が知れまして、岐阜に帰ることとなりました。

大阪に出てきてから岐阜に帰るまでの約1年間、何とか生きていたのは、この社会関係資本を得られたことが大きかったのだと思います。社会関係資本があったことで、何もなくても何とかなると感じていましたし、逆にそれが無ければ、どん底へ落ちていくということを私は身をもって経験しました。ですから、地域の子どもたちに対して、少しでも何かつながりをつくるのが大事なのだとすることを伝えていく、そういった居場所ができると良いと思っています。

次のスライドをお願いします。オンライン上にある場所やつながりがサードプレイスとなり得るのかということについては、皆様で議論していただければと思います。ただ、先ほどタブレットが子どもたち全員に配られており、いつでもどこでもつながることができるという話がありましたが、学校関係者以外がつながることができない、これはネックだと思っています。子どもたちが学習支援室で過ごせる時間は限られます。タブレットを用いた、より時間的制約のないオンラインでの交流は、つながりを深めたり維持していくことの大きな一助になると思います。民間の信頼できる組織とも積極的につながれるようにしていただけると良いと思っています。以上です。

#### ○佐藤事務局長

杉浦様、ありがとうございました。大坪様、杉浦様には、この後も引き続き会の最後までご参加いただきます。よろしく願いいたします。

それでは、ここで一旦休憩とさせていただきます。14時50分から再開させていただきますので、お願いいたします。

( 休 憩 )

#### ○佐藤事務局長

それでは、会議を再開させていただきたいと思います。

改めまして、本日、委員の皆様にご協議いただきたいことといたしまして、コミュニティ・スクールの深化、サードプレイスの充実をさらに推し進めるため、教育委員会等が取り組む必要がある具体的な施策、方向性について、ご意見を頂戴したく存じます。

それでは、委員の皆様から、順にご意見を伺ってまいりたいと思います。では、まず川島委員、いかがでしょうか。

## ○川島委員

川島です。よろしく申し上げます。大坪先生、杉浦様、本日は、非常に貴重なお話をありがとうございました。

コミュニティ・スクールに関して、私が事前に用意していた内容を今から申し上げますが、その内容をとても恥じています。どんな内容だったかという、私はこれまで小学校から高等学校のコミュニティ・スクールに参加してきましたが、その中で、思っていたことがあります。それは、学校が地域に何をしてくれるのかという話が多いことです。地域でこういう行事があるから、学校から生徒を何人出してほしいといったものや、先生の見回り等で学校がどのような形で地域に対してサービスや奉仕をするか、そういったテーマが多かったように感じていました。

ですから、コミュニティ・スクールは、今後の理念やその方向性として、地域が学校に対して何ができるかということを考えるフェーズに移っていかなければならず、そのためにどう仕掛けをつくっていくべきかというものです。

しかし、大坪先生のお話の中で、学校と地域は対等であり、地域、日本を支える子どもたちと一緒に育てるとあったように、ここまで理念を高められ、定着しているということが、今、白川郷学園が成功している1つの要素であることに非常に興味を持ちましたし、私自身の見識がそこまで達しておらず、少し恥じているところです。また、私としては、学校と地域が一体となってと言うだけでなく、家庭も加えて一緒に子どもを育てていくという、これがコミュニティ・スクールの本来の理念であると、再認識いたしました。

コミュニティ・スクールは、地域と学校という切り口から語られることが多いのですが、やはりそこに家庭というものを加えるべきだと、私は感じています。学校の教員が保護者に対して指導することや厳しく直言することが難しくなっている中、家庭に課題がある保護者に対して、アドバイスや直言ができるのは誰かと考えた時に、地域が果たせる役割というものもあるのではないかと思います。かつて私自身も子どもを叱っていたとき、ある地域の方に、子どもは叱るものではないよ、と諭されたことがありました。今後、学校運営協議会の中に、どのような形で家庭を加えていくかということ、課題にしていきたいと考えているところです。

そうした意味で、本日の白川村は、本当に良いまちだと思いますので、岐阜市も理念を高く持ち進めていただきたいと思います。抽象的な話になりますが、岐阜市民憲章の理念を子どもたちに伝えていき、岐阜市を背負って世界に出る子を育てる、こういった高い目標を持ってコミュニティ・スクールを捉えるという形に見直していく必要があると、話を伺っていて思いました。

この話題の最後に改めて申し上げますが、地域が学校に貢献する必要があるということは、学校からは言い辛いでしょうから、本日の会議の中で、もう今の時代は、地域が学校に貢献する必要があるのだと、委員から発言があったこともぜひ発信していただきたいと思います。思っております。

続いて、サードプレイスに関するお話をいただきまして、杉浦様、大変ありがとうございました。こちらの論点についても、実は私の見識不足を恥じているところがありまして、今まで岐阜市教育委員会の中で、サードプレイスを開設する場合、主に教育的な面からアプローチし、議論をしておりました。

ただ、今日のお話の中では、本日の事務局の説明も、施設を中心にいかに子どもたちが生き生きと充実して学び、育つためには、どのようなサードプレイスが必要かといった切り口だったように、私は感じました。

しかし、杉浦様からご提示いただいた切り口は、福祉的なアプローチで、どのようにして全ての子どもたちを一人も取り残さず守っていくか、育てていくかというものだと感じました。サードプレイスの考え方について、教育的によりよくという部分のアプローチ、一人も取り残さないという福祉的なアプローチ、切り分けるべきなのか、一緒に考えていくべきなのかという点は、まだ議論が必要ですが、福祉的なアプローチも必要であるということについては、改めて思い知らされたように感じております。

その中で、サードプレイスに関する私の意見を申し上げます。サードプレイスは、自分で選べるということが最大の特徴で、自分で選べるからこそサードプレイスになり得るわけです。そのためには、選択肢として良質なものを、積極的に子どもたちに提示することが重要です。困ったときはここ、新しい友達をつくりたいときはここ、人とのつながり、社会的資本を持ちたいときはここだというように、良質な選択肢を幾つも用意して子どもたちに紹介し、そのアクセスをつくるというのが大事であると感じています。

私が子どもの頃、実は部活動と塾がサードプレイスだったと思うのです。部活動は、中学校の中で子どもたちが唯一選べるものだと先生方がおっしゃっており、自分で選べるか

からこそ、そこを学校、家庭に次ぐサードプレイスとして、自分が大切にできればいいのだと思います。また私の子どもの場合も、塾がサードプレイスになっていました。勉強もしながら、様々な友達とわいわい賑やかに過ごしていました。そうした意味では、杉浦様が実践している教育もそういうものだと思いますが、自分で選べるからこそそのサードプレイスであるものの、それゆえ、サードプレイスは逆にコントロールすることが難しく、やはり選ばれなければサードプレイスたり得ませんから、事務局の説明にあった施設やプログラムの充実だけではなく、どうすれば子どもたちに選ばれるか、こういった視点が必要であると思います。

もう1点、最後に触れていただいたオンラインの問題について、良くも悪くも自分で選ぶからこそサードプレイスであるという概念でいけば、有益、有害を問わず、オンライン上のコミュニティもサードプレイスたり得てしまうと思います。しかも、子どもたちの中で、非常に選択されやすいサードプレイスになっているということを、我々は自覚する必要があります。そうした中で良質なサードプレイスを提供し、そこに子どもたちや若者が興味を持ち、救いを求めて参加していただける仕組みがどうしても必要ではないかということも、今日のお話の中で感じました。ありがとうございました。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、足立委員、いかがでしょうか。

#### ○足立委員

足立でございます。本日は大坪様、杉浦様、貴重なお話をありがとうございました。

まず、白川郷学園のお話を伺いまして、先ほど川島委員がおっしゃったように、コーディネーターの新谷さんのお言葉で、協力ではなくて対等な立場で共に作り上げることが、大変印象的でした。

私たちは、コミュニティ・スクールをどのように発展させていくかということを考える際に、協力するという言葉がすぐ口をついて出てしまうのですが、もうそんな認識では駄目だということ、明確に言われたような気がしております。

そして、その理念を実践し、全国学力・学習状況調査において、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という項目や、「地域の行事に参加していますか」という項目に当てはまると回答した割合が非常に高ただけでなく、「自分に

はよいところがあると思いますか」や「将来の夢や希望を持っていますか」という項目においても、岐阜市はここが低いということをいつも憂っているのですが、当てはまると回答した割合が非常に高く、本当に素晴らしいと感じました。元々は、15歳で独立しなければならないという環境的な厳しさがあるからこそ、そうした教育を始められたという点において、白川村の逞しさを感じさせていただきました。ありがとうございました。

杉浦様からは、実際に運営しているサードプレイスについてお聞きしまして、実は、岐阜市にこのような場があるということを初めて知りましたし、また行政もそれを支援していただいているということに、大変感動いたしました。

サードプレイスとは、家庭にも学校にも居場所がない子に、第3の居心地の良い場所を提供するものだということについて、確かにその通りだと思います。もちろん、子どもたちだけでなく、私たち大人もそういった場の必要性を感じることもあると思いますし、そういった場をもつことが、生きていくことにつながるのだと思います。こうした場を提供していくことは非常に意味のあることだと思ひ、感激いたしました。

ただ、こうした場所は、必要とする全ての子どもたちの身近なところにあるのか、という点において、まだまだではないかと思ひました。教育委員会としても、このような場をより広げていくことが重要だと感じました。

また、施設という観点からみると、ご紹介いただいたような小さな場所も必要ですし、メディアコスモスをはじめとした広い施設を活用する場合、箇所数も限られますので、そこへの移動方法にも課題があると思ひます。また、休日あるいは平日のいつ使えるのかの調整など、様々な検討が必要になってくると思ひます。

それから、放課後児童クラブをサードプレイスという視点で捉えますと、本市は、子どもたちの見守り、預かりの域にまだ留まっていると感じます。放課後児童クラブで過ごす時間は、子どもたちの放課後において、非常に長い時間を占めております。ここがサードプレイスになっている子もいれば、居心地の良い場所になっていない子もいるかもしれません。以前、放課後児童クラブでできることを増やしていくといった議論もあったと記憶しております。通う児童も増えておりますので、どんどん考えていただきたいと思ひます。

また、今年度の総合教育会議でもテーマとなりました、教員の働き方改革の視点から、部活動を地域とつなげていこうという議論もあります。部活動では、ある程度の時間までを学校の部活動とし、その後を地域に委ねるといった事もできるのではないのでしょうか。平日だけでなく、休日の運用についても考える必要があると思ひます。

学習塾は、まず前提として個人の選択が必要になると思いますが、先ほどの小学校の校長先生が杉浦様のコミュニティを紹介された事例のように、日々子どもたちに接している学校教員が、そうした知識も深めて提案していくなどの多面的なアプローチが必要であると感じました。どうもありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、武藤委員、いかがでしょうか。

### ○武藤委員

武藤です。本日は大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

コミュニティ・スクールについてですが、白川村のこの実践を見させていただき、簡単にすぐ納得させず、根拠を求めるといってお話に、非常に感銘を受けました。

ふるさと学習というと、何かふるさとはいいところ、愛すべきところ、愛着を持ちましょうと、感覚的な言葉で語られることが多い、そんな印象を今まで持っておりました。もちろん、私もそのこと自体を否定はしません。私自身も生まれた岐阜が大好きで、今もここで暮らし生活しておりますが、そういうことではなく、ふるさと学習は何のためにするのかということにこれまで若干の違和感を持っていたので、根拠を求めるといところは非常に重要だと思いました。

地域で脈々と受け継がれていることというのは、単に偶然の産物ではなく、そこに生きてきた人々が、今まで様々なことを積み重ねてきた根拠がしっかりとあるのです。その根拠に触れ、共鳴してふるさとを愛し、そしてそれが、自分もそこに携わっていこうという気持ちを持つことにつながっていく、そういった過程を大事にする必要があるということ、教えていただいたような気がします。

その根拠を求めるとあって、白川村では、地域の方、コーディネーターの皆さんに直に教えを請うて、その根拠を解説していくという過程であるというように、理解いたしました。今、学校では、主体的・対話的で深い学びの必要性がクローズアップされておりますが、地域の方々との対話により、今までその地域に受け継がれてきたもののよさ、その根拠をも大事にしていくということは、今のこの学習スタイルにとってもマッチしたものだと思います。逆に言えば、ふるさと学習を通じて、主体的・対話的で深い学びを実現しているのだと思いました。今回、ご講演頂いた事例を踏まえ、岐阜市ではどのような教育を

行っていくか、さらに議論を深めていく必要がありますが、ふるさと学習に限らず、学び方自体の大きな指針となるものを提供していただいたと思いました。大いに参考にさせていただきます。ありがとうございました。

次に、コミュニティ・スクールについて、事務局からお示しいただいた今後の方向性に関して申し上げたいと思います。まず、コミュニティ・スクールの構成員に、その学校を卒業した高校生、大学生、20代の大人を参画させるという方向性ですが、これは私が以前から提案させていただいていたもので、取り入れていただいていたと思います。

先ほどの白川村の子どもたちは、地域の方と対話し、様々な根拠を見つけ、深めていました。そこからさらに踏み込んで、地域の大人側でも深めることができると良いと思います。そうすることで、子どもたちの学びもより深まりますし、そうした子どもたちが卒業し、大人になって、また子どもたちと共にさらに地域への理解を深めていくという、非常に良い循環ができるのではないのでしょうか。

もう一点、学校行事と地域行事の合同開催という提案がありましたが、非常に良い考えだと思いました。地域では、諸団体が工夫しながら様々な行事を行っておりますが、ともすると似たようなものがいくつもあり、またその運営も同じ方が兼務しているような場合が多いように思います。こうした行事の精選を行っていく中で、場合によっては組織自体の精選につながり、地域ごとに動きやすい組織ができてくると、実効性がより高まるのではないかと思います。

続いて、サードプレイスについて申し上げます。こちらについては、私のサードプレイスに対する見方について、考え直しを迫られるものでした。

杉浦様のご講演の中で、サードプレイスは、中立、平等であり様々な条件が設定されるべきでないというお話がありまして、今までの私のイメージとは180度違うものでした。私は、サードプレイスというと、例えば子ども食堂のように、貧困対策などある一定の層に対してどうアプローチするか、という観点から捉えがちでした。

しかし、決してそうではなく、様々な条件をつけることなくフラットな立場であるというところにサードプレイスの良さがあり、そうした視点でサードプレイスを見ていかなければならないのだと思いました。

さらに言えば、中立な場所であるということは、誰にでも開かれた場所であるということになりますので、特定の誰かを優遇する訳ではないのだとすると、サードプレイスは、行政にとって、実は取り組みやすい課題なのではないのでしょうか。サードプレイスの整備

にあたっては、行政が全ての子どもたちに開かれた場所という視点に立って検討していくことが、必要だと思いました。

招聘者の方々から新しい視点を提供していただいたことで、今後さらに議論を深めていかなければと、思いを新たにいたしました。ありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、伊藤委員、いかがでしょうか。

### ○伊藤委員

教育委員の伊藤と申します。大坪先生、杉浦様、本日は、大変有意義なご講演をありがとうございました。

まず、コミュニティ・スクールに関して申し上げます。大坪先生のご講演にありましたように、かつて私が高校生の頃、その同級生に、15歳で下宿をして学校に通っている、飛騨地方出身の子がいました。当時の私は、母にお弁当を作ってもらい、雨の日になると、父の車で学校まで乗せていってもらい、そんな甘えた生活をしておりましたので、彼が一人で生活しているということに、大変な驚きを持っていました。

その彼は、部活も熱心で、成績も優秀、そして人望も厚く、誰からも好かれる青年で、なぜそのように立派な人なのかということ、高校時代から不思議に思っていました。彼について語る上でのキーワードの一つに、自分の生まれ育った故郷がありまして、実家に帰った際、さるぼぼのお土産を買ってきてくれたことや、自分の故郷のまちについて誇らしく私たちに話してくれたことが、とても印象に残っています。

当時、現在のコミュニティ・スクールのような制度は無かったと思いますが、その頃からきっと地域の中で、自分のまちに対する愛情やプライドを育む環境があったのではないかと思います。つまりこれと同じで、白川村のこの村民学もまた、地域の中で脈々と受け継がれてきた、歴史あるものなのではないでしょうか。

その彼は今、そういったアイデンティティを胸に、心臓外科医として世界で活躍しています。彼の頑張れる源は一体何なのか、きっと自分が生まれ育ったそのまちへの誇りというものに、そのヒントがあるのではないかと、当時から考えておりました。

そして、大坪校長先生のご講演にもありましたように、白川村の子どもたちは、自己肯定感が非常に高いということが数値としても現れており、地元に対する愛情と誇りを持つ



で成長していけば、頑張れる力になる、強い心が育まれる、そういったエビデンスとしても有効になってくるのではないかということ、改めて感じました。

私の子どもが通う小学校は、当時、本市で最初にコミュニティ・スクールを導入した学校で、それから10年以上が経ちました。現在のコミュニティ・スクールの導入割合が、全国的にはまだ30%台である中、本市は既に、全ての学校に導入がなされています。このように、本市にとってコミュニティ・スクールはもはや当たり前のものとなっているのですが、ただ、あまりにも当たり前になっているがゆえ、そもそもコミュニティ・スクールは何のためにあるのか、という本質を見誤ったまま活動している節があるのではないのでしょうか。導入から時間が経過し、その活動の深化が求められる時期ですから、この機に改めて本質を考えていくということが必要ではないかと思えます。

例えば岐阜小学校では、コミュニティ・スクールを地域創造型に発展させることを考えています。これは、地域の中で、地域と共に学校、子どもたちが成長することを目指していくというものです。コミュニティ・スクールは何のためにあるのかということについて、今一度、ステークホルダーの方たちが同じ認識を持つことが大切になってくるのではないかと考えております。

また、岐阜小学校では、関わっている方たちの高齢化が進んでいるのですが、スライドで拝見する限り、白川村の協議会のメンバーは若い方が多く、大変驚きました。若い世代の方のパワーというのを、ぜひ今後、メインにしていかなければならないのではないかと思えます。

岐阜小学校に限らず、コミュニティ・スクールは、保護者や地域の団体の役員等がメンバーになっていると思いますので、ぜひ地元の企業や岐阜に支店のある企業等にも参加していただくと良いのではないのでしょうか。企業もCSR活動の場を求めていますし、子どもたちと関わるといって、なお一層喜ばれると思います。さらに企業だけでなく、士業の方等もメンバーとして加わって頂けると、コミュニティ・スクールの活動がより活性化するのではないかと思いました。

次に、杉浦様からお話を伺いましたサードプレイスについてです。杉浦様が運営している学習支援室は、間違いなく子どもたちのセーフティーネットであり、人権を守ってくれる場所ではないかと思えます。私ども教育委員会が、もっとこの活動を認識しなければならないのと同時に、子ども未来部などとのつながりもあると思いますので、両輪となってこうした貴い活動を支えていかなければならないと思っています。

学校では生き生きと過ごせ、家庭にも温かく居心地の良い空間があるということが理想ではありますが、中にはどちらもないお子さんもいらっしゃいます。そうした子どもたちにとって、それ以外に信頼できる大人がいるかという点、決してそうではないと思います。杉浦様のご講演を伺って、その子にしっかりと向き合う、大人との関係性をすごく大切にすることが、サードプレイスとして備えるべき条件の一つになるのではないかと思います。

杉浦様の運営されている学習支援室をはじめ、地域にはサードプレイスになり得る場所が存在しているにもかかわらず、学校とうまくつながっていない状況があると思いますし、一方で、子どもたちを行かせるのであれば、信頼できる場所でなければなりません。先ほどの岩野田北小学校の例にもありましたように、先生が自ら足を運び、ここならと太鼓判を押して行かせられるようにする、といった地道な方法しか今はないかもしれません。しかし、そこに行政としてできることがあるのではないのでしょうか。アクセスが良く、安心して活動できる場所に関する情報を提供するなど、そういった事から始めていくべきではないかと思いました。ありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、横山委員、いかがでしょうか。

### ○横山委員

横山です。大坪様、杉浦様、どうもありがとうございました。

まず、コミュニティ・スクールに関して申し上げます。私は、これまで様々な機会を通じて、岐阜市のコミュニティ・スクールの実質化ということを申し上げてきました。全校に設置されているコミュニティ・スクールが、実効性のある組織になっているかどうかという観点から考えまして、さらに深化させるための案をこれから申し上げたいと思います。大坪先生のご講演を伺って、私の考えは的外れなものではないと感じました。

私が懸念しているのは、岐阜市のコミュニティ・スクールが法律に定められた役割のみを粛々と行っているだけなのではないか、ということです。加えて、運営が学校任せになっているのではないか、他の校区のコミュニティ・スクールの取組から刺激を受けるようなことはあるのか、といった点も懸念しています。

私は、コミュニティ・スクールというからには、その名にふさわしい活動展開が必要だ

と考えています。そのためには、やはり柱となる常勤の専門人材が必要だと思いますし、小回りが利く支援推進委員会が、どれだけ体を動かして取り組むかが重要になると思っています。この実働部隊である支援推進委員会には、先ほど伊藤委員の発言にもありましたが、その地域に関わりのある企業や学生など、多様な方たちに入っていただくと良いと思います。まずは、実働部隊がしっかりと活動していくことが、コミュニティ・スクールの深化、具現化につながるのではないかと考えています。

また、岐阜市の全校区のコミュニティ・スクールが参加する連絡協議会といったものを年に一度開催し、各校区の取組を出し合い、互いに刺激し合うことが必要だと思います。良い取組に対しては、教育委員会からの表彰や、予算配分における配慮等があっても良いと思います。こうした施策を実践することで、社会に開かれた教育課程をしっかりと実現できるのではないかと考えています。

大坪先生のご講演にありましたように、科学するということは、とても重要だと思います。特に、導入部分で、白川村全体の予算と、教育に関する予算がどれだけあるかといったデータや数値をしっかりと調べさせるところ、そして、9年間を通して系統的に学ぶことはとても良いと思いました。この村民学は、まさに社会に開かれた教育課程そのものであり、その実践になっていると思います。地域の課題をプログラム化して学校の教育課程に入れ込んでいくということに非常に感心しました。

また、実際の活動においては、コーディネーターの方が学校に協力するというのではなく、コーディネーターが自ら考えて実践しているという点が印象的でした。私は、コーディネーターという名称よりも、コミュニティ・ティーチャーといった名称に変更し、より自主的に取り組めるよう促していく方法もあるのではないかと考えています。

白川村の取組を伺って、まさに私がこうなると良いと思っているコミュニティ・スクールが実践されており、より具体的に理想像を描けるようになりました。ただ、岐阜市と白川村では、自治体の規模や地理的条件が異なります。白川村を学びながら、岐阜市なりの施策を打っていく必要があると思っています。

次にサードプレイスについてですが、事務局の説明では、社会教育施設を主に挙げておりましたので、そうした既存施設のリニューアルを行うにあたって、サードプレイス的な視点を加えたり、内容面の見直しも図っていくと良いと思います。また、セーフティーネットとしてということであれば、地域ごとに、その受け皿や担い手となる組織の育成及び連携を検討していく必要があるのではないかと考えました。ありがとうございました。

## ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

## ○水川教育長

大坪校長先生、杉浦様、本当にありがとうございました。非常に勉強になりました。

杉浦様のご講演を伺いながら、今年開校した不登校特例校である、草潤中学校のことを考えていました。健全な子どもを育成するためには、学校の中はもちろんのこと、それ以外の居心地のよい場所がどうしても必要であるということを、改めて痛感いたしました。

草潤中学校は、昨年までほとんど学校に来られなかった子どもたちが通ってくれていますが、そのうちの7割の子が現在も登校しています。そして、2割の子がオンラインで勉強しています。1割の子は欠席ですが、この驚異的な出席率の理由は、草潤中学校が、その子のありのままを認める居心地のよい場所として存在しているからだと思うのです。

くつろぎや安らぎ、楽しみを感じられる場所が人間には必要であり、それは学校だけでなく、学校の外にもたくさんあるのだということ、そして、そういったことを認識して、教育委員会はきちんと子どもを育てなさいと教えていただいたと思っています。これからの社会教育を含めた、教育の方向性を示していただけたいと思っています。本当にありがとうございました。

それから、大坪校長先生のご講演を伺って、5年目を迎えた白川郷学園の取組が、私が校長を務めていた頃よりも格段に深化をしていると感じました。

先日、私は1,000人のふるさと先生の名簿を作成することについて、市長と話をしたのですが、白川村のふるさとアドバイザーは、村民1,479人のうち260名が人材登録しておられ、これを岐阜市に換算しますと、人口約40万人に対し、単純計算で約7万人の登録者がおられるわけです。岐阜市と白川村で条件が違うことは、十分承知しておりますが、本日のお話を伺い、私たちも頑張らなければと思いを新たにしました。

また、その学校の継続的な運営という観点から、白川郷学園は、校長が変わっても、学校の大きな方針や地域との関わりが変わることなく、むしろより深化している点は特筆すべきことだと思います。校長は3年前後で異動するケースが多く、校長が変わる度に運営方針も変わってしまうことがあります。

しかし、校長が変わってもその地域の特色やそこに暮らす方の地域愛、地域の学校に対

する思いは変わりません。そういった思いをつなぐという意味で、コミュニティ・スクールは絶対に必要だと感じました。岐阜市には、住宅街もあれば、田園地帯もあり、各地域が様々な特徴を持っています。各地域にあるコミュニティ・スクールこそが社会に開かれた教育課程の実践、あるいは地域の人の願いをつなぐために必要であると思いました。

岐阜市では、生き方の探究学習に取り組んでいますが、人の生き方や文化というものに対するアプローチは、まだまだ足りていないと思っています。

岐阜市はこれまで、大学や大手企業と積極的に連携し、先進的な教育を行ってきました。正しい表現ではないかもしれませんが、ブランド志向があったように思います。しかし、今改めて思うことは、ブランドが大事なのではなく、全ての子どもたちの、この町に生きている僕という存在、私という存在に対するプライドを醸成し、深化させていく必要がある、そう強く思っております。

改めて、良いご講演を拝聴させていただけたと思っています。ありがとうございました。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、市長、お願いいたします。

#### ○柴橋市長

今日は大坪先生、杉浦様、ありがとうございます。

私の思いは、最初の挨拶で随分とお話ししたつもりですが、大坪先生のお話をお聞きし、白川村の子どもたちは、地元に着した学びを続け、日本へ、そして世界へ挑戦しているのですが、私はここに大きなギャップがあるように感じています。

白川村という、ある種ローカルのコミュニティから、世界というグローバルなところへつなげていくために、子どもたちがどのように学び、世界というものを意識し、自らが世界で活躍したり貢献したりしているところまで描けるようになるのでしょうか。この村民学の一連の学びを通して、そういったマインドへどのように昇華させていっているのかという点に、とても興味があります。岐阜市の子どもたちをそこまで昇華させることができるか、それが課題でもあると思っております、具体的な目標や取組、学びの中での位置づけなど、実際にどのようなことを行っているのか、コメントをいただければありがたいと思います。

## ○白川郷学園 大坪校長

本学では、9年生の夏休みにオーストラリア研修が位置づけられております。そこに向けて、白川村を発信しつつ、オーストラリアの文化を学んでおり、世界に目を向けるという教育はそちらで取り組んでおります。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大のため、この2年間は行くことができませんでした。そこで、5年前に配布した一人一台タブレットを活用し、オンラインで他の地域や多様な人々とつながり学ぶという仕掛けを、積極的に展開しました。

例えば、学校が臨時休業となった3ヶ月の間に、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の方、沖縄の小学生、東京の芸術家など、様々な方々とつながったことで、子どもたちの見える世界やその学びは、格段に広がりました。

大前提として、子どもたちに対して白川村に戻ってこいとは言わないようにしている中で、他の場所に目を向けるという思考が、子どもたちにはあります。子どもたちの方から、どこの子と話してみたいといったリクエストもよくありまして、則武小学校もそのうちの一枚でございます。

また、白川村出身で他の場所で活躍していらっしゃる方とも関係を築いています。現在、学校運営協議会のメンバーが、大学生ピックアップという活動を行っているのですが、例えば、僕はこうやって白川で育ち、大学の柔道部で頑張っているといった内容のショートムービーを作成し、子どもたちに見せるなどしています。白川村全体として、日本の他の地域との距離が近く感じるような取組が行われておりますし、子どもたちにもそういった思考が定着しています。

## ○柴橋市長

大坪先生、ありがとうございます。飛騨の白川村ですから、常日頃より、大勢の方が観光でいらっしゃるのかもしれませんが、ただ、実際の日常生活において、子どもたちが外部の人と接したり、情報に触れるわけではない、そのことを逆手に取り、オンラインで積極的に情報を得たり、他の地域の多様な方々とコミュニケーションを取ることで、子どもたちの視野は大きく広がり、その先は無限大なのだということが、よく分かりました。

我々の場合は、手の届くところにそういった環境があり、容易にアクセスできてしまうことで、そこに対する渴望というものが乏しいのかもしれませんが。岐阜市も一人一台端末の配布が昨年9月に完了しましたので、2歩も3歩も先に行く、白川村の取組を大いに見

習わなければならないと思いますし、もっと積極的に取り組まなければと感じています。

サードプレイスに関する杉浦様のご講演で、校内カフェについてご紹介頂きましたが、私が最初の挨拶でご紹介した、ふたば未来学園には、まさに校内カフェが設置されており、サードプレイスが学校の中に存在していました。視察で拝見させていただいた際、たくさんヒントが学校の中にはあるのだと、思いました。

カフェの運営は生徒がやっておりましたので、その生徒と仲の良い生徒たちがカフェに行き、コミュニケーションするというだけでなく、そのコミュニティに別の生徒たちも関わっていくといったことも見られました。仲の良い友人同士だけの場ではなく、新たな関係が生まれる場所にもなっており、つながりという大きな意味で、まさにとても良いサードプレイスになっていたと感じました。

先ほど水川教育長がおっしゃったように、1,000人のふるさと先生の名簿を作ろうということで動き出しておりますが、まさにこの地域や学校に関わってくださる方や子どもたちのために、一肌脱ぐぞと言ってくださる方を、個人だけでなく企業、団体も含めてどれだけ我々が掘り起こし、学校と一緒に取り組んでいけるかということが重要だと思っています。1,000人という数字は、そう簡単ではありませんが、頑張っていきたいと思えます。ありがとうございます。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございます。大坪様、杉浦様、それぞれ一言いただけますでしょうか。

#### ○白川郷学園 大坪校長

本日は貴重なお話をお聞かせいただき、本当にありがとうございました。

#### ○コミュニティサポートスクエア 杉浦代表

本日お話をさせていただいたことが、今後につながっていくと良いと思っております。ありがとうございます。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございます。最後に、総括として市長より一言、いただきたいと思えます。

## ○柴橋市長

改めて、本日お越しいただいたお二方に、感謝申し上げます。オンラインも良いですが、対面の良さも実感いたしました。お互いの気持ちを汲みながら、共通の課題について思いを寄せ合えることは、本当にありがたいことだと思っております。本日は、ありがとうございました。

## ○佐藤事務局長

本日は皆様より多くのご意見、具体的な施策・方向性を頂戴し、誠にありがとうございました。いただいたご意見等は、事務局で改めて整理させていただき、最終回の年間総括にてまたお伝えさせていただければと思います。

なお、本日の会議録につきましては、後日、岐阜市ホームページでの公開を予定しておりますので、よろしく願いいたします。

また、大坪様、杉浦様におかれましては、本日は大変ご多忙の中、ご出席を賜り、誠にありがとうございました。

次回の第5回総合教育会議は、12月24日金曜日、「岐阜市版GIGAスクールの更なる推進」について、ご協議をお願いできればと考えております。

それでは、これをもちまして令和3年度第4回岐阜市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。

---

(15時30分閉会)